



若きテレビ制作者への手紙

放送倫理検証委員会決定第12号 別冊

(1) はじめに

意見書を読んでくれたらどうか。

現場の最前線で番組をつくっている、若手のきみの感想はどうだろう。

意見書はプロデューサーや総合演出が読めばいい？ 自分とは無関係？

そんなことはない。絶対にならない。

今回の意見書でとりあげた『イチハチ』と『主治医が見つかる診療所』は、どちらも、ロケの現場で問題が起きていた。つまり、きみと同じような若手スタッフが深くかかわっていたのだ。

意見書にもくわしく書いてあるとおり、それぞれの問題は、出演者との対応や現地ロケを担当したスタッフの単純なミスや確認不足から生じてしまった。彼らが「あれ？ へんだな」というのを現場できちんと感じて、「ちょっとおかしくありませんか？」という声をあげていれば、問題は起き

ずにするだかもしれない。若手スタッフが「番組を救ったMVP」になるチャンスは、たくさんあったのだ。

なのに、実際にはできなかった。ミスがミスを呼んで、どんどん問題は大きくなってしまった。私たちはそれが残念でしかたない。そして、今回のような問題が再び起きないことを願いつつ、意見書にこの手紙を添えることにした。

「自分があの場合にいたら、ちゃんとできた」と、きみは言うだろうか。
胸を張って「絶対にだいじょうぶ!」と断言できる? ほんとうに?

ちょっと自信が揺らいで不安になったひと、そして意見書を読んで「自分があの場合にいても、同じようにスルーしちゃうかも」と思ったひとは、どうか、つづきを読んでくれないか。この手紙は、現場の最前線にいるきみに向けて、書かせてもらったものだ。

(2) 「便利」の落とし穴にはまらないで リサーチから出演者決定まで

今回の2番組は、いずれも出演者決定に際して、インターネットを使ったりリサーチが安易、少しキツイ言い方をすれば「いいかげん」だった。

インターネットは確かに「便利」で、番組の企画を立てたり出演者を決めたりすることをずっと楽にしてくれる。ふつうなら三日かかるリサーチも、ネットを使えば一晩ですむことだってあるだろう。

でも、スピードがアップすると、そのぶん危険も増してしまう。自動車の運転と同じだ。

実際、インターネットに出ている情報には不確かなものも多いことは、みんなよくわかっているはずだ。たとえばバラエティー番組でも、ロケをおこなって情報を見せるときにはウラ取りをしなくてはいけない。これも、テレビの世界で働く人なら誰だって知っているだろう。

でも、今回の2番組では、それがきちんとできていたとは言えない。インターネットの「便利」さに慣れすぎたのだろうか。だから情報の扱いが「いいかげん」になってしまったのだろうか。

インターネットは引用やリツイートであふれかえっている。その中から正しい情報を選び分けていくのは、たしかに大変だろう。でも、そこを「いいかげん」にやってしまうと、きみのつくるテレビ番組が、誤った情報や不確かな情報を「拡散」してしまいかねない。

気をつけよう。慎重にいきましょう。ほんとうに。

(3) 人に対しての「強さ」を持って 出演者との距離の取り方

この場合の「強さ」とは、言うまでもなく、「上から目線」という意味ではない。

ただ、今回問題になった2番組はどちらも、現場の若手スタッフが出演者に対して弱すぎた。「気

をつかう」というのを通り越して、「怒らせてはいけない」とビクビクしていたように思えてならない。

たとえばプロデューサーから「事実関係を確認せよ」という指示が出たら、本人に直接訊いて、それでOKとしてしまつ。

でも、「客観的に見てもだいじょうぶ」というところまでいかないと、確認にはならないんじゃないか？ 本人の言葉だけでOKにしてしまうと、今回のように視聴者に誤解を与える結果になりかねないし、事実を客観的に示せなくなることもありうる。さらには、万が一、「だましてやろう」と狙っている出演者と出会ったなら、あっさりひっかかってしまうかも……。

たとえ本人が「私の言葉を信じないのか」と不満に思ったとしても、ウラをしっかり取らないと、ほんとうに危ない。

もちろん、タレントではない一般人が出演する場合は、さまざまな気配りが大切になるだろう。

スタッフとしては「出演してもらおう」という姿勢になるのもしかたないかもしれないし、「テレビに出してやる」というゴーマンな姿勢よりはそのほうがずっといい。

でも、これだけは忘れてほしくないのは、「出演してもらおう」というのは、あくまでも番組サイドの視点であって、視聴者にはなんの関係もない、ということ。

バラエティー番組の視聴者は「面白いこと」を期待している。その期待には、ぜひこたえてほしい。ただ、一般人が登場するときには、さらにもう一つ求められるものが加わる。「こういうひとがほんとうにいるんだな」「これは事実なんだな」という視聴者の信頼、それをどうか裏切らないでほしいのだ。

出演者に対する礼節はきちんと守ったうえで、たとえ出演者にムツとされても「視聴者のために正しい情報を放送しなければ！」という強い意志を持って事実を客観的に確認してほしい。そうやってきちんとウラを取ることが、結果的に、出演者を誤解や疑いの目から守ることにもつながるの

だから。

(4) 「おまかせ」は怖い ロケを仕切るのは、きみの責任

番組のためにきつちりと作り込んだスタジオ収録と違って、ロケの現場には予期せぬアクシデントがつきものだ。しかも（これは局や制作会社のエライ人たちに文句をつけたいところだが）、ロケハンなどの準備も満足にできず、スタッフの人数や時間も不十分なまま、とにかく撮るしかない、というケースは数多いはずだ。

今回の2番組でも、ロケ中に状況がどんどん変わってしまったことが、問題発生の大きな要因の一つになってしまった。ディレクターはその対応に追われているうちに、気がつく、仕切り役を出演者サイドにまかせてしまい、事実関係のチェックもろくにできないまま、ロケの終了時刻を迎

えて……というわけだ。

もちろん、ロケは出演者も含むスタッフ全員で作りあげるものだ。とにかく時間も人手も足りないなか、「私が連絡しておきます」「私の方で準備しておきます」といった出演者の言葉はうれしいものだろう。

でも、その言葉にあっさり飛びついた瞬間、きみは現場で取り仕切る責任とやり甲斐を捨て去ってしまったことになる。

なにか問題が起きたとき、「出演者が言い出したことだから、私のせいじゃありません」とは言えないだろう？ もしもそんなことを言ったら、やはり無責任になってしまう。

それになにより、きみは「番組をつくりたい」と思って、この業界に入ったはずだ。じゃあ、出演者に「私がやっておきます」と言われたら、ありがたい申し出に感謝しながらも「連絡はこっちでやりますから、先方の電話番号だけ教えてください」と答えたほうがいいんじゃないか。そうし

ないと、自分で「つくっている」「実感も責任も持てないまま、「つくらされている」「立場になって
しまいそうだ……」。

仕事のキツさはわかる。でも、きみはロケの責任者だ。ロケをしっかりと仕切るのは、きみの役目
であり、義務であり、権利なのだ。

さらに広げていうなら、ロケにかぎらず、自分に任されたパートが番組の中でどんなふうに使わ
れるのか、どんな位置づけになっているのか、ということも意識してほしい。直接の担当は番組の
「一部分」でも、番組「全体」への視線を、ぜひ持ってくれないだろうか。そうすることで制作者
としてのいつそうの楽しさと責任感が生まれ、より良い仕事ができるはずだ。

(5) おわりに

いま、私たちの手元には、番組制作者への全国アンケートの結果がある。これは、2010年10月から2011年1月にかけて、民放労連プロダクション・関連労組共闘会議と、メディア総合研究所「メディアの産業構造」研究プロジェクトが共同でおこなったものだ。

その中に、『現在の仕事での不満や不安点（仕事の内容面）』という項目があって、上位二つの回答はこうだった。

「番組制作費にゆとりがない」

「制作期間にゆとりがない」

現場の最前線にいるきみも、その結果にはうなずくに違いない。

ゆとりのなさ　今回の問題も、根っこをたどっていけば、そこから生まれてしまったものだっ

たと言っていていいだろう。

長々と書いたこの手紙も、「それを読むゆとりすらないことが問題なんだ」と言われてしまうと、返す言葉はない。

それでも意見書に手紙を添えた理由は、ただ一つ。

きみに、元気にのびのびと番組をつくってほしいから。

意見書にもあるとおり、今回の問題は、現場でのほんのわずかな不手際や甘さが生んでしまったものだ。でも、それは裏返せば、ほんのわずかな「しっかり確認しよう」「自分で最後まで責任を持つ」という思いさえあれば防げたことでもある。

ほんとうに残念だった。さらに、「ほんのわずか」で防ぐことができなかったばかりに、今後のバラエティー番組が「また問題になったらどうしよう」と心配ばかりして、面白さをなくしてしまつたら……私たちは、それを一番恐れているのだ。

どんどん新しい面白さにチャレンジしてほしい。

そのためにも、必要なのは、やはり「強さ」ではないだろうか。時間に追われていても情報を慎重に扱う強さ、出演者に対する礼儀正しい強さ、自分の仕事に最後まで責任を持つ強さ……。それを支えるのは、きみの番組を楽しみに待っている全国の視聴者なのだ。

「視聴者のために」という思いを常に忘れずにいることで、きみはもっと強くなるはずだ。そして、そんなきみが制作者としてかかわることで、テレビはさらに面白くなるだろう。私たちはそう信じているし、心から願っている。

最後まで読んでくれてありがとう。

今日の仕事もがんばって。